いつか見た夢

長部日出雄

津軽書房

長部日出雄

いつか見た夢

津軽書房

著者略歴

長部日出雄（おさべ　ひでを）
1934年弘前市に生れる．早稲田大学文学部中退．週刊誌記者，PR 編集者，TV ドキュメンタリー構成，ルポルタージュ，映画解説などの仕事を経て，小説の執筆に従事．「津軽世去れ節」「津軽じょんから節」で第69回直木賞を受賞．

著書『津軽世去れ節』（津軽書房）
『鰐を連れた男』（講談社）
『津軽から飛んだ』（筑摩書房）
『津軽風雲録』（講談社）
『消えた城塞』（角川書店）
『善意株式会社』（津軽書房）

いつか見た夢

昭和五十一年十月十五日初版発行

定価　千五百円

著　者　長部日出雄

印刷者　白井倉之助

発行者　高橋彰一

青森県弘前市品川町二八番地
津軽書房
電話〇一七二―三三―一四一二番
振替　秋田二三七四番
郵便番号　〇三六

印刷　精興社
製本　矢嶋製本

いつか見た夢　目次

わが師わが友

渡り鳥交遊録　11
一九六〇年　56
初対面のころ　63
葛西善蔵と私　65
『わが日わが夢』について　68
木山さんの磁力　70
吉行淳之介と娼婦の街　80
ダモイ先生　92

日常酒飯

わが日常 105
日　録 108
山河遙かなり 111
自転車泥棒 114
行きはよいよい 119
スペインの夜 124
快食快眠快便 128
酔いざめ日記 130
いつか見た夢
久蔵の行方 139
落語　不思議の国のアリンス 146
一枚のレコード 161

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女神がくれた宝物 166
これが映画だ――『8½』 172
これぞ人間――ウォルター・ブレナン 188
二日酔いで書いた手紙 192
ハメリンの笛吹き 196

題を与えられて書いた文章

二十歳の原点 207
わがトイレットロジー 209
私のケチな部分 213
わが思春期の犯罪 216
わたしのなかの性 219
私のタイトル縁起 221

がまんの限界 224
われ発見せり 227
オレの三枚目的部分 229
酒との出逢い 232
ああ、武勇伝 235

振子と磁石

家なき猫たち 241
引越し人生 250
しまらない話 263
振子病について 270
夢と現実 273
対談の仕事 276

「地方」を書くことの意味 279
風雪平野 282
北辺の武将 285
ネプタの夏 286
マイホームの暗い底には…… 288

旅の記憶

幻の桃源郷 295
吉備路で会った人たち 307
忘れ得ぬひと 312
狩猟民の血 322

棟方志功の世界

風土について　345
棟方志功と津軽　349
あとがき　371
初出誌一覧　372

カバー絵　桜庭利弘
写　真　副島　泰
（講談社提供）

いつか見た夢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わが師わが友

渡り鳥交遊録

私うたう人

田中小実昌さんは飲み屋に歌をうたいながら入って来る。それも頭のてっぺんから出るようなカン高い声である。初めのうちは奇声に聞こえる。よく聞くと、それは美声も美声、まるで田谷力三さんのような声なのだ。

ときにはボーイ・ソプラノのように聞こえることさえある。そこでわたしは心中ひそかに、田中さんと滝田ゆうさん、黒田征太郎さんの三人に、「ウィーン少年合唱団」をもじって、「ウィーッ少年独唱団」という尊称を呈上している。

このご三家の特徴は、まず、飲むとうたう、ということだ。したがって「ウィーン」ではなく

「ウィーッ」である。

次に、ご三家とも髪が短い。田中さんの場合は、短いというより、多くないというか、少ないと申上げたほうが、より正確かも知れないが、とにかく坊主頭である。滝田さんも、だいぶ白いものがまじってはいるが坊主頭。黒田さんもクルーカットというより坊主頭に近い。

加えてご三家とも童顔。懸命に声を張上げてうたっているところは、まさに「少年」の感じで、新宿の飲み屋が、たちまち小学校の唱歌の時間のようになってしまう。

このご三家、合唱も好きだが、独唱となると、いっそう熱と力がこもって、さらに生彩を放つおもむきがある。だから「ウィーッ少年独唱団」なのだ。

三人とも、とにかく歌が好きだ。飲み屋にいるあいだ、ほとんどのべつまくなしにうたっていることもある。うたうために飲んでいるのか、飲むためにうたっているのか、見分けがつかないほどである。

田中小実昌さんはなぜ、うたいながら飲み屋へ入って来るのだろう。

物静かに、上品な飲み方をする方方ならともかく、あまり上品とはいいがたい飲み方をする人間にとって、知合いの飲み屋へ入って行く瞬間は、なんとなく気恥ずかしい感じがするものである。

いや、田中さんの飲み方が上品でないというわけではない。田中さんだけでなく、ここにあげたご三家の飲み方は、わたしにくらべて数等上品である。が、それは、わたしにくらべて……の話であって、ほかの方方にくらべてもなおかつ、上品であるといえるかどうかは判らない。

それに田中さんは、もともと大変なテレ屋だから、歌をうたいながら入って来るのは、飲み屋へ入る瞬間の気恥ずかしさを、それで切抜けようとする一種のテレ隠しであるのかも知れない。だが、どうもそれだけでもないようなのだ。数年まえ、わたしが青森県の弘前市に住んでいたとき、ある夜、電話がかかって来て、出てみると田中さんの声だった。「新宿からですか」と聞くと、

（いや、いまおたくの近くまで来てるのよ）

と、田中さんはいった……。

「うちの近くって、どこですか」

と、電話の向こうの田中小実昌さんに、わたしは聞いた。

（下北、淋しいところだね、ここは）

田中さんの小説の読者なら先刻ご承知のことだろうとおもうが、田中さんは淋しいところへ一人で旅をするのが好きなのだ。

「下北まで来たんだったら、弘前へも寄りませんか」

（うん。でも、とにかくもう二、三日は、下北にいるよ。ここはとても淋しいところだね。今晩はこれから、女中さんにお酌をしてもらって、晩御飯をたべるの。じゃ、またね。ウフフ……）

特徴のある笑い声がして、電話が切れた。わたしは下北の海辺の宿で、中年の女中さんにお酌をしてもらいながら話を聞いている田中さんの姿を想像し、きっといい小説ができるだろう……

という気がした。
しばらくして、また電話がかかってきた。
(……もしもし、ぼく、タナカコミマサです)
「ああ、田中さん、どうですか、下北の夜は」
(それがねえ)
田中さんは情なさそうな声を出した。(女中さんが最初の一杯だけお酌してくれただけで、どうぞごゆっくり、といなくなっちゃったのよ)
「じゃ、いまは一人っきりで飲んでいるんですか」
(そうなのよ。ここは淋しくて、とてもいいところなんだけどね。ちょっと淋しすぎるような気もしてきたのよ。だから、あした、まっすぐ弘前へ行こうとおもうんだけど、いいかしら)
「いいですよ。弘前に着いたら、電話を下さい。駅へ迎えに行きますから」
電話を切って、わたしはおかしくなってきた。うたうために飲むのか、飲むためにうたうのか判らないほど歌が好きな田中さんにしても、たった一人きりの部屋では、得意の美声を張上げるわけにもいくまい。
それに、これはまえから感じていたことでもあったけれども、田中さんはやはり、淋しがり屋のくせに淋しいところへ一人で旅をするのが好きで、一人旅をしているうちにまた人間が恋しくなる人のようだった。
東京を離れて弘前に引きこもっていたこっちも、すこぶる人恋しくなっていたころだったので、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com